〔曾禰好忠集〕六月終

妹と我ねやのかさとにひるねして日たかき夏のかげを過さむ

〔枕草子十二〕見ぐるしきもの

夏ひるねしておきたる、いとよき人こそ今すこしおかしけれ、ゐせがたちはつやめきねはれて、ようせずばほうゆがみもしつべし、

〔徒然草上〕眞乘院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり、〇中略 とき非時も、人にひとしく定てくはず、わがくひたき時、夜なかにも曉にも喰て、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふ事きゝいれず、目さめぬれば、いく夜もいねず、心をすましてうそぶきありきなど、〇下略

〔泊酒筆話〕一大伴俊明通稱山岡治左衞門柳營侍臣後に剃髮して、明阿といはれき、〇中略 平生睡眠する事なく、つとめてねぶらじとにはあらねども、癎症にやたえてねぶたしといふ事を覺えずとかたられけり、夜は枕につきて、なほ筆紙をとりつゝ、書寫などせられければ、今にそのうつされたる事どもの、筆をひきつづけたるやうの筆くせありき、或時從者一人を具して、近きあたり旅行せられき、旅屋につきて、從者は道の疲にたへずして、枕をとるやおそきと、寐入りぬるを、明阿は例のねられねばよびおこして、淋しきに今しばしかたらひてなとて、ものがたりしていねさせず、曉にいたりしかば、從者は大きにわびて、つとめていとまをこひて、獨り家にかへれりけるとぞ、をかしき物語なりけり、

〔古史徵一春〕古史徵のそへごと

吾が伊夫伎の屋の平田の大人、〇中略篤胤、往し文化八年の十月、おなじ學の徒どち相はかりて、柴崎直古が、江戸より歸るに、誘ひ奉りて、吾鄉へ請まをして、此國わたりの御弟子ども、夜晝うごなは